郷土摂津 いにしえ通信

平成十年十一月一日　第七号

発行
摂津市三島一丁目一番一号
摂津市教育委員会
生涯学習部　生涯学習課

金剛院「不動明王立像」が修復されます。

平成十年九月十七日、大阪府の重要美術品に指定されている金剛院の不動明王立像が京都市の財団法人美術院へ移され修復されることになりました。美術院は仏像等文化財の修復を専門に行う全国唯一の修理所です。

今回は、傷みが目立つ所の修復が中心ですが、修復の過程で銘文・胎内納入物・胎内仏などが見つかるかもしれません。なお同像が金剛院に戻るのは三月末の予定です。

寄木造りの等身像。弘法大師の作と伝えられています。その手法から平安時代後期の作と推定されています。

→ 修復前

↑ 慎重に梱包します。

特集！秋の特別展

◎その① 府内の展示

榎坂郷蔵人村の日々
中世村落の考古学
とき　十二月六日まで
ところ　吹田市立博物館
☎〇六ー三三八ー五五〇〇

よみがえる文化財
文化財資料館テーマ展
とき　十一月十五日まで
ところ　茨木市立文化財資料館
☎〇七二六ー三四ー三四三三

河内国へのいざない
七～九世紀の中河内
とき　十二月六日まで
ところ　東大阪市立郷土博物館
☎〇七二九ー八四ー六三四一

卑弥呼の宝石箱
ちょっとオシャレな弥生人
とき　十一月二十九日まで
ところ　大阪府立弥生文化博物館
☎〇七二五ー四六ー二一六二

発掘された日本列島
新発見考古速報展
とき　十一月二十二日から十二月二十日まで
ところ　大阪市立博物館
☎〇六ー九四一ー七一七七

西国巡礼と葉室組行者
三十三度の旅の祈り
とき　十二月六日まで
ところ　竹内街道歴史資料館
☎〇七二一ー九八ー三二六六

高安城と古代山城
とき　十一月二十九日まで
ところ　八尾市立歴史民俗資料館
☎〇七二九ー二四ー五一一一

人面付き土器（茨木市目垣遺跡）

（P4につづく）

おじいさん・おばあさんに聞きました
摂津市域　ちょっと昔のくらし
その7　米作り（2）

ドタ（泥田）での米作り

摂津市域はドタ（深田）が多くありました（主として淀川と安威川の間。）

ここでの米作りは、他にはない苦労があり、また、さまざまな工夫も行われていました。

ドタでは裏作の麦や野菜が作れず、米のみの一毛作でした。

板ナンバ・桶ナンバ

（田げた・足桶）

板ナンバは足が泥の中深くに沈まないようにゲタのようにはく道具です。桶ナンバは冷たい水や泥で足が濡れないようにはく桶です。語源は南蛮だろうといわれています。

手と足が同時に出る歩き方をナンバと呼んだようです。

イナオシ・ミゾオシ

ドタ用の小さな田舟です。人が乗るのではなく刈り取った稲穂を運んだり肥をまくとき肥桶を積みました。

ウネダ

田の泥土の上に水が深くかぶってしまっている場合は、水面下に畑のようなウネを作ります。みぞ状に掘り下げた土を使って、水の浅い部分を作るのです。

田植えは普通、後に下がりながら植えますが、ウネダの場合は、みぞを前に進みながら左と右に植えていきました。

→ 板ナンバ

← 桶ナンバ

体験談

「ドタは、見たところ、あぜ道もなく、広い沼のようです。他人の田との境界は杭一本です。慣れない若い嫁さんが、他人の田まで田植えしてしまったこともありました。」（別府等）

「牛もドタで働くのはいやがります。足はめり込むし腹は泥水につかるからです。あぜから離れる方向に進むのは特にいやがります。」（別府）

肥くみ

化学肥料が出回るまでは、人糞が主要な肥料でした。だから農民は都市部（大阪など）まで肥をくみに行きました。

米作りで肥を必要とするのは、田植え前の田こなし（代かき）のときと、夏の追い肥です。

麦や野菜などを作るとなると一年中必要です。

バリキ（馬力、荷車）

肥くみに出かけるのは、夜中過ぎか、朝なら暗いうちです。バリキに肥桶を積んだのを牛に引かせます。

大阪へ行くと仕切っている人の指図を受けて、くむ家が決まります。

肥舟

バリキでなく、舟で行く人もいます。中には専用舟を持っていて、肥運びを仕事にしていた人もいました。

体験談

「通いなれてくると、牛は勝手に正しい道を歩くようになります。」

「安威川では、肥を運ぶ帆かけ舟がたくさん見られました。」（味舌）

担当　（源）

郷土史コーナー

◎中世の味舌

中世の味舌には、味舌庄がありますが、まず最初に『庄』『荘』のことと荘園について述べたいとおもいます。

荘と庄

今でも「別荘」や「山荘」などと用いられていますように荘とはもともと中央貴族など有力な支配者が地方にもっていた別宅のことで、その周囲の土地を合わせて私的に支配した単位の名称です。日本の中世では「荘」の略字として「庄」が使われました。今でも「庄園」と書く場合がありますが、どちらの字でも意味に違いはありません。

中世に由来する地名

本庄、新庄とか「何々庄」あるいは本郷など「何々郷」や「別府（符）」の地名は、みな中世の地域名で、支配者の名でした。つまり平安時代後期以来、国内が有力貴族や大寺院などの私有地の荘（庄）園と国司の支配する公領とに分かれ、それぞれ荘（庄）・郷・保・別府など、村落を中心とした地域的単位から成り立っていた状況の名ごりです。

初期荘（庄）園

奈良時代後期、公地公民の原則が崩れて、墾田の私有が認められますと、各地に荘園が拡大していきました。

この時期の荘園の特色は、①荘の中心となる宅（荘家）や倉、耕地はあっても、専属する農民はいませんでした。②周囲の村々の農民が地子（小作料）支払い、一年契約の小作人となって耕地を行なっていました。③荘を開発する時、相当多数を雇うことはあっても、開発された土地の耕作に、奴隷的な人々を使役する大農場的経営は行われませんでした。

このような荘園は、村落を中核とした中世の荘園とはかなり違っていました。そのため、「初期荘園」と呼んで中世の荘園と区別するのが普通でした。

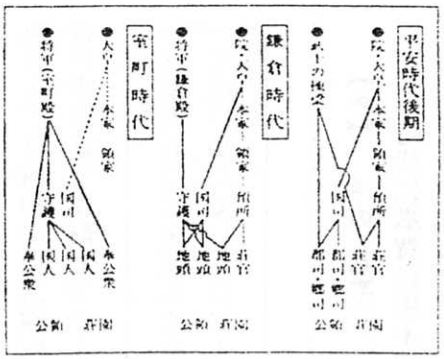
中世の荘民

中世の農民は、身分・階層が複雑で、わかりにくいですが、荘園領主の立場から見ますとおよそ三つの階級にまとめることができます。第一に「名主」と呼ばれます有力農民がいました。彼らは一種の農業経営請負人と考えられ、荘園の上地を分割して設けられる「名」の経営をまかせられていました。第二に名主の指揮の下で働く「下人・所従」と呼ばれる人でした。しかし、現実に農村で働いています農民のなかではごく一部にすぎませんでした。数の上で最も大きな比重を占めたのが第三の「作人」と呼ばれる人々でした。荘園領主から土地を与えられておらず、名田や荘園の一部を請負耕作し、領主から年貢以外の公事・夫役を懸けられることもありませんでした。

中世の味舌庄

千里丘陵から安威川にかけて広がる沖積地に設けられました庄園で、甘舌・真舌とも書かれています。

摂関家渡領でありますが領有関係は大変複雑でした。



↑　中世史のなかの荘園

※平凡社「大阪府の地名」週刊朝日百科「日本の歴史」より

担当　（茗荷）

考古雑話

第７回　わかりつつある縄文時代の生活⑦

三内丸山遺跡の発掘と縄文時代の生活

キーワード③　「多い」

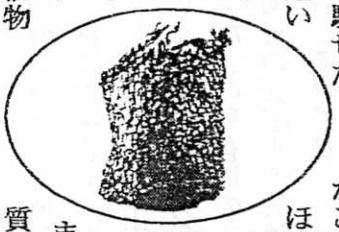
前回はキーワード「長い」について説明しました。今回はキーワード「多い」について説明します。

多いとは三内丸山遺跡で検出される遺物の量が、ダンボール箱に換算して四万箱分にものぼり桁外れに多いことを示します。

出土した遺物は洗浄、乾燥、復元、実測などの内業作業を経て整理・分析されます。まだまだ作業は継続中でこれからも大きな発見があるかもしれません。これより順次、発掘された遺物を中心に当時の技術の高さを紹介していきたいと思います。

(a)土器　三内丸山遺跡からは円筒土器というバケツをたてに引き伸ばしたような形の土器がたくさん出土します。円筒土器はおおまかに下層式（縄文時代前期）と上層式（縄文時代中期）に分かれます。それぞれがさらに細かく分かれますが近年は下層式を二段階上層式を三段階に分けて考えるのが主流です。三内丸山遺跡からは円筒式期全時代の土器が確認されています。

(b)木製繊維製品　三内丸山遺跡の遺物廃棄フロックは泥炭層で幸運にも有機質の遺物が豊富に残っていました。その中でも「縄文ポシェット」と名を馳せたかごは完全に近いほどかたちをとどめており当時の技術の高さに驚かされます。



植物質の遺物は他に腕輪、組み紐、布片などが発見されています。

（つづく）

特集！秋の特別展

◎その②　府外の展示

銅鐸を造る

大岩山銅鐸とその時代

とき　十一月十五日まで

ところ　滋賀県野洲郡野洲町大字辻町五七ー一　銅鐸博物館

☎〇七七ー五八七ー四四一〇

琵琶湖と中世の人々

信長以前・信長以後

とき　十一月八日まで

ところ　滋賀県蒲生郡安土町下豊浦六六七八

安土城考古博物館

☎〇七四八ー四六ー二四二四

三万年前の旅

ナウマンゾウから汽車土瓶まで

とき　十一月二十三日まで

ところ　兵庫県姫路市本町六十八番地

兵庫県立歴史博物館

☎〇七二九ー八八ー九〇一一

縄文人と弥生人

その時代を生きた人々の表情

とき　十一月十五日まで

ところ　兵庫県神戸市西区糀台六丁目西神中央公園内

神戸市埋蔵文化財センター

行楽のおり足を運んでみてはいかがでしょうか！

【き】　木内石亭

〇江戸時代に滋賀県坂本で生まれた木内石亭は安永二年（一七七三）に『雲根志』をあらわす。〇一般鉱物や各種石器の解説を行い日本における先史学研究のさきがけとなりますす。〇みずから弄石社を組織し全国に愛好家の輪を広げました。〇石亭の業績により石器は人工的に製作された加工物であるという定義が普及していくことになります。

担当　（伊部）